

## 復活節第三主日

2010. 4. 18

高円寺教会 7:30 ミサ

ヨハネ 21・1-19

私が神学校1年目、今は廃止されてないのですが、栃木県那須にありますが「ガリラヤの家」という場所で、神学校初年度養成を受けていたときの話です。「ガリラヤの家」の周辺にはいくつも修道院がありまして、そもそも「ガリラヤの家」も、ベタニア修道会が経営する「光星学園」…多分今は違う呼び方をしていると思いますが…その「光星学園」という施設の一角にあったのですが、その周りにはある修道院の一つに、ある日時間があつたので自転車に乗って遊びに行きました。行ったのはお昼頃だったのですが、お茶やお菓子をいただいてシスターと夢中で話をしているうちに、いつの間にか日が暮れてしまったんですね。「こりゃいかん！」と思って修道院を飛び出し、自転車に乗った方がいいんですが、周りには一つの電灯もなく目の前さえ真っ暗で何も見えない。おまけに道は畑の間を通る細い道で、一歩間違えれば畑に突っ込むといった危ない道だったのです。ですからしょうがなく自転車を引きながら、そろそろと歩いて帰りました。自転車に乗って行けば10分チョットで行けるところを、その時は1時間以上、その間ずーっと夜の闇の中で、その心細さといったらありませんでした。何も頼れるものがないと思ってしまうその不安感。まあ正直言って怖かったです。東京者が初めて体験した「闇夜」でした。

さてそんな何も見えない「夜」、「暗闇」なのですが、今日の福音でも分かれるとおり、漁をするにはこの「夜」が最適だったようです。今もそうなのかは分かりませんが、ともかく、ペトロをはじめとするイエス様の弟子7人が、漁に最適な夜、舟に乗り込んで漕ぎ出しました。ですが「その夜は何も獲れなかった」と今日の福音には書いてあります。実はその夜に限らず、イエス様の弟子たちが漁をするとき、夜には決まって魚は獲れないんですね。『ルカ福音書』のペトロたちの召命の場面でもそうでした。今日の福音でもそうです。魚が獲れるのは、漁をするには適さない夜明け、地上に光が現れてからなのです。

皆さんもとっくにお気づきだと思いますが、この聖書の記述、「夜には何も獲れない」という記述には福音書を書いた記者たちの重要なメッセージが込められています。確かに魚を獲るには最適の時間であつたろう「夜」。しかし「夜」は私たちの目を見えなくしてしまいます。全てを覆い隠してしまいます。そして何よりも光のない暗闇は私たちを不安にし、怯えさせるのです。先程言ったように、私はその怖さを那須で体験しました。見えない不安、頼るものがない不安、それは「目」ばかりではなく「心」の有りようも含まれるでしょう。ヨハネ福音記者はこの「夜は何も獲れなかった」の記述

によって、光不在の闇の中を、不安な心でさまよっている弟子たちを浮かび上がらせているのではないのでしょうか。

しかし夜が必ず朝に変わるように、闇に光が射し込みます。全てを照らすまばゆい光、それこそがイエス・キリストだったのです。夜明けと共に光である復活のイエス様が現れます。そしてやさしく「子たちよ」と呼び掛け「何か食べる物があるか」と仰るんですが、実はこの「何か食べる物があるか」ということば、新約聖書の原文であるギリシア語を直訳すると「あなたがたは食べ物を持っていないだろうね」となるんだそうです。つまりイエス様は、暗闇の中でどんなに必死に活動しても収穫はないことを知っていました。弟子たちが大きな実りを得るためには、光と共に働かなければならなかったのです。光であるイエス様が共にいてくださるからこそ、弟子たちの活動には大きな実りがもたらされ、またその活動を支える力となる日々の糧も与えられるのです。そして何よりも「主が共にいてくださる」この安心感こそ、後の弟子たちの勇気を奮い立たせる大きな原動力になったのでした。イエス様が現れ、そのことばに従うことによって多くの収穫がもたらされます。獲れた魚は153匹。一説によるとその当時知られていた魚の種類が153種類だったとのこと。つまり世界の全てのものが、労働の実りとして弟子たちに与えられる。そこにはイエス様が共にいること、イエス様のことばに従うことが不可欠なのです。

さて自分たちに大漁をもたらしてくださったのがイエス様だと気づき、泳いで戻ったペトロをはじめ、弟子たちが陸に戻ると、獲れた魚を待つまでもなくイエス様が朝食の準備をしてくださっています。夜通し働いてクタクタだったであろう弟子たちを気遣うイエス様。こんなところに何とも言えないイエス様の優しさが見えてきて心があたたかくなりますが、まあそれはともかく、ここでイエス様は「今とった魚を何匹か持ってきなさい」と言われます。主の計らいによって、そして弟子たちの労働によって獲得した実りを捧げるわけです。するとイエス様はそれを弟子たちに分け与えられ、彼らは働くための新たな力を得る。さあこの一連の動き、何かとそっくりだと思いませんか。そう、私たちの今行っている「ミサ」です。今日の福音の朝食の場面には、正しく「ミサ」の原形があります。つまり私たちはミサを行う度に、「さあ食事をしなさい」と私たちに呼びかけてくださる復活の主に会っているのです。私たちはみことばに従って働き、それによって収穫を得ます。私たちの労働とは何でしょうか。それによって得る収穫とは一体何でしょうか。私たちの労働とはみことばを述べ伝えること、つまり「宣教」であり、それによって得る収穫とは「教会の発展」なのです。その労働と収穫に必要な力の糧を、イエス様はミサを行う度に私たちに準備してくださるのです。

イエス様は私たちに食べ物を与えてくださいます。この食べ物はイエス様が起こす奇跡によってもたらされます。イエス様が奇跡を起こされるのは、自分が偉大な者であることを誇示するためではなく、愛によって私たちに真の幸福に導くため

す。ですからパンとぶどう酒がイエス様自身のからだ、血となる聖体の秘跡にも、私たちといつも共にいてくださるイエス様の愛がぎっしり詰まっています。ご聖体は単に私たちのお腹を満たすのではなく、「主が私たちと共にいてくださる」「主が私たちに力を与えてくださる」と実感できる食べ物なのです。

私たちは今日も、ミサでこのいのちの糧をいただき、それを通して、今日の福音で「愛する弟子」が叫んだように、「主だ」と、「主と一緒にいるんだ」と、喜びをもって叫ぶことができますように、ご一緒に祈りましょう。

カトリック高円寺教会  
助任司祭 林 正人